

伊勢田氏への再コメント（神崎宣次）

思いもかけず研究会前に返答がきたので、当日の時間の節約のため、2と3について再コメントしたいと思います。

2.に対する伊勢田氏の返答：「倫理判断の普遍化可能性は一般には受け入れられていない、とのことであるが、たしかに言葉としてはほとんどの人が知らないであろうけれども、実質的な内容としては、多くの人々が当然の前提として受けれているのではないだろうか？ 普遍化可能性を前提とした倫理的議論のスタイル（立場が逆になっても同じことが言えるのか、と問い詰めたりあちらとこちらで言っていることが一貫していないではないか、と批判したり）は広く存在する。」

「倫理判断は普遍化可能」を多くの人々が当然の前提として受けいれているという伊勢田氏の主張は、やはり私には妥当なものとは思えない。少なくとも私は、倫理判断とは普遍化可能なものであるという確信は持っていない（むしろそんな確信は持てないという確信を持っている）し、これは倫理に関わる議論の前提ではなく問いであるだろうと考えている。しかしながら、こういった主張についてどっちが正しいかをここで言い争っても水掛け論にしかならないだろうから、論点を変えて論じたい。

ここで述べたいのは、伊勢田氏の返答の中で言われている「倫理的議論」の特殊性あるいは狭さについてである。専門家間でのアカデミックなやりとりであるならば、本書を通して伊勢田氏が強調されているような論理性や一貫性を備えた「議論」でなければならないかもしれないが、倫理に関わる問題について思うところを述べたり、他人を説得したりする仕方は倫理(学)的議論だけではない。というよりも、アカデミックな流儀に準ずる議論というのは非常に特殊なコミュニケーションのスタイルというべきではないだろうか。そして動物倫理学者や動物解放論者が一般の人びとというより広い集団と動物倫理に関してコミュニケーションしようとする際に、相手の側にもそのようなスタイルをとることを要求できるという根拠はない。自分とは別のやり方もあるのだ。こういったことを考えれば、伊勢田氏の返答の後半部は「倫理判断は普遍化可能であるという前提を人々が実質的に受けいれている」という主張のための十分な根拠とはなっていないように思われる。（そして、おそらくはアカデミックな議論の流儀ですら一つではないだろう。）

さらに言えば、伊勢田氏自身も本書の中で戦略としての妥協 (p. 325) や権威に基づいた説得 (p. 320) といった倫理(学)的議論ではないスタイルでの訴えを読者（潜在的にはより広い範囲の一般の人々）に対して行ってしまっている。

以上のまとめとしては、次のように言えばいいだろうか。次の返答にも見られるように、伊勢田氏は議論の前提などについて述べる際に「われわれ」という言葉が使われているが、少なくとも私には「そこにおれを勝手に含めないで」と懇願する倫理的根拠があるし、コメントとそれに対する伊勢田氏の応答を見るかぎり、野崎氏もそこには含まれていないのだろうと思う。

3.に対する伊勢田氏の返答:「ラディカルな環境保護と動物解放論の差は、何度も繰り返すことになるが、すでにわれわれが受け入れているものを出発点にしているかどうかである。その意味で、環境保護の100年と動物解放論の100年は大きく異なった道をたどるのではないかというのが今のわたしの予想である。」

動物解放論の過去と将来についてのどのような見通しに基づいて本書が書かれたのかという問いについては、十分にお答えいただいたように思う。ただここで指摘しておきたいのは、環境保護と動物解放論は道徳的配慮の対象を自然物にまで拡張していくという過程を共有している以上、その出発点の多くは共通していると考えられるのではないかという点である。したがって、ここで伊勢田氏が主張されているような差があるかどうかには疑問が残るように思われる。